若越郷土研究
51の2

特別寄稿

酒井忠勝私論

中島辰男

(1) 始めに

小浜酒井藩祖酒井忠勝は天正十五(1587)年から寛文二(1662)年まで、七十六年の生涯であった。時は戦国時代が豊臣秀吉による惣無事令の天下統一となり、慶長五(1600)年関ケ原の戦いから徳川幕府成立、大坂冬・夏の陣をへて元和偃武、以後三百年にわたる徳川政権の平和の基礎が確立する時代である。

明治維新はかって関ケ原で敗れた薩長両藩によって達成され、譜代の名門小浜藩は一時薩長と戦い朝敵に擬せられたこともあって、明治の新時代の潮流に大きく遅れたといわれている。したがって藩祖忠勝についても、嶺南地域の有志が明治政府の許可を得て、小浜城本丸御殿跡に忠勝を祭神とする小浜神社(戦前は県社)を創建したに過ぎなかつた。今日忠勝の銅像も建立されておらず、市主催の郷土の偉人顕彰者でもない。酒井忠勝の評価は一般的に今ひとつの感無きにしも非ずと言うべきか。したがって、この小論はあらためて忠勝について私なりに論じたものである。

(2) 若狭の宰相

山口県出身の安倍晋三氏が首相に就任した。戦前に伊藤博文以下五人が総理に、戦後も祖父の岸信介や大叔父の佐藤栄作についで三人目、都合八人が輩出されている。おそらく全国でトップであろう。因みに戦前の山口、鹿児島両県出身の総理は八人、就任日数は昭和二十年まで一万七十八日、期間の四十六パーセントを占めている。いかに維新から敗戦の日まで両県出身の指導者が、わが国のありように大きくかかわって来たかが分かろうというものである。

わが福井県はいかがであろうか、海軍大将岡田啓介ただ一人である。もっとも嶺南にかぎれば残念ながら皆無だ。しかし、歴史をさかのぼれば江戸時代の初期、老中・大老を三十二年間も勤めた酒井忠勝は今の総理にも比定される人物ではないかと私は考える。ただ長いというばかりではなく将軍秀忠・家光・家綱の三代に仕え、江戸幕府三百年の平和の時代への政策を樹立しているからである。私は忠勝こそ若狭の総理ではないかと思う。しかし、忠勝の死後四百年近く今も偉人として顕彰の雰囲気もなく、毎年五月二日(明治政府の神社創建許可の日)の小浜神社例祭にも特に忠勝の遺徳を偲ぶ行事が営まれる事はないようである。

そもそも、わが国は長く稲作を中心とする社会であった。いま県立若狭歴史民俗資料館では文化庁主催で「日本列島発掘2006」の特別展が開催されているが、特別展を見ると人間は自然界から食料を得ていた時代から、定住して食物を栽培するようになって戦をするようになったのである。災害や天候不順から不作になると、飢饉から逃れるため、穫り入れの秋に他の村々を襲う略奪が始まっ

たのではないか（映画「七人の侍」に見る）。この時代から石製の刀が造られたようである。そして、青銅の刀・鉄の刀に進歩していく。今を生きる私達はこのような困難の中を生き抜いた人々の子孫と言うべきであろう。しかし、人類は一千年以上にわたって今に至るまで、理由はともかくも戦争の惨禍から抜け出す事が出来ていない。米が社会の根幹であったから、稲作のため村の成り立つ条件を整える事が、少なくともこの時代の領主の役割であった。

（3）　忠勝の略歴

そんな戦国の世、天正十五年に三河の国西尾の城で生を受けた忠勝は、同十八年秀吉によって家康が関八州を与えられると、家康に従い父忠利とともに武蔵川越へ移る（四歳）。

以下、忠勝一生の略歴のあらましを辿る。慶長五年十四歳で関ケ原に初陣、同十四年父忠利とともに江戸へ参府し、父は老中に忠勝は讃岐守に叙任（二十三歳）。同十九年下総の国で知行三千石拝領（二十八歳）。

元和六年将軍秀忠の命により、家光付きの守り役となる（三十四歳）。同九年家光に扈従して上洛、家光（二十歳）三代将軍になる。このとき家光より二条城の南の傍らに二万坪の京都屋敷を拝領する。（後に幕末最後の将軍慶喜は文久三年十二月から慶応三年九月まで三年十カ月、将軍後見職や禁裏守衛総督として、御所に近いこの小浜藩邸を本拠として維新の動乱に対処したのである。平成十四年、御池通りの藩邸跡の篤志者の店頭に「小浜藩京都屋敷跡」の碑が百三十年ぶりに建立、小浜市長により除幕された）。

寛永元年上総・下総・武蔵加増、三万石で父と共に老中となる（三十八歳）。同四年父忠利卒す。遺領を加え八万石、川越城主となる（四十一歳）。同五年家光より牛込の地四万坪を江戸下屋敷として拝領する。同七年忠直誕生。家光、疱瘡になる。同九年秀忠卒す、十万石に加増。

同十一（1634）年家光上洛、家光、姉婿の小浜藩主京極忠高を松江二十六万石へ国替え、その後へ、忠勝は若狭一円・越前敦賀・江州高島郡十一万三千石を拝領、小浜城に入る（四十八歳）。同十三（1636）年下野の国一万石加増。小浜へ入る。小浜城天守閣完成（五十歳）。同十五年老中から幕府初の大老になる。

同十八年家綱誕生。忠勝夫人を小浜心光寺へ葬る（五十五歳）。同十九年全国的飢饉のため忠勝小浜へ入る。同二十年天皇即位式の為上洛、途路小浜に入る（忠勝最後の小浜入り）。

慶安二年「慶安の触書」公布。長男忠朝を廃嫡し、四男忠直を嫡子となす。同三（1650）年家康三十三回忌、日光東照宮に五重塔建立寄進（六十四歳）。同四年家光卒す。四代将軍家綱十一歳。慶安事件。政権の交代を取り仕切り、幕政の安定を図る（六十五歳）。

明暦二（1656）年家督を忠直に譲る（七十歳）。万治三年日光山で剃髪空印と号す（七十四歳）。

寛文二（1662）年、江戸牛込邸で卒す（七十六歳）。後代の藩主に比べいたく長命であった。

以上が忠勝の略歴である。忠勝は寛永十一（1634）年から明暦二（1656）年まで若狭小浜藩主を二十二年間勤め、藩の家老

に対する江戸からの書き下し（指令）は四百通に達している。上述のようにこの間の就国は、前後四回期間は都合一ヵ年にも達していないが、これは幕府の重鎮で江戸を離れる事が出来なかったからである。

酒井家から二度にわたって地元小浜に寄贈された「酒井家文書」は忠勝が藩主としての施政のありようを今に伝えている。以下忠勝の家光への忠誠を追ってみたい。

（4）　家光と忠勝

秀忠はかねて忠勝の人柄を見抜き、元和六年十七歳の家光の守り役に抜擢する。忠勝は家光より十七歳の年長であった。家光は出生と共に生母お江の方の手を離れ、のちの春日の局に育てられたが、二年後に生れた次男忠長は終始お江の方に育てられ、両親に寵愛されていたという。このような空気の中、忠勝の家光への帝王学は重大な任務であり、様々な苦労があったが、忠勝は誠心誠意家光の傳育にあたった。

あるとき家光が疱瘡を患い重症になったところ、弟忠長の側近たちは其れを聞いて喜んだ。忠長を次期将軍へとの空気を感じ取っていたからである。そのさなか忠長が空腹を訴えたので台所人たちは急いで食膳に取りかかった。それを見た忠勝は強く側近達に注意し、「兄君が病に呻吟されている。弟君がそれを喜ばれるはずがない。食事など喉をとおるだろうか」といってすぐに忠長の食膳を下げさせた。

ほどなく秀忠が家光の見舞いにやってきて「忠勝、先に立て」と命じた。忠勝は忠長の意に反した所業から手討ちになるかもしれないと思い、意を決して先に立ち秀忠を家光の寝所に案内した。家光の容態はよく病は快方にむかっていたので秀忠はそれを見て大いに喜び、忠勝の忠誠心に感じ入ったという。

家光は元和九（1623）年二十歳で忠長を抑えて三代将軍になる。将軍になっても忠勝の変らざる忠誠は続き、家光の信頼厚く忠勝は寛永元年父忠利と同じ老中につく。将軍家光はお忍びが好きでよく夜歩きをしたという。側近が諌めても聞き入れないので忠勝は思案の末、家光の草履を自分の懐で温めることにした。家光は出かける時草履が暖かいのに気付き、誰の仕業かと注意していると忠勝がやっている事がわかった。家光は「それほどまでに心配してくれているのか」と反省して夜歩きを止めたという。

寛永十六年江戸城の火災で家光は牛込（前述）の小浜藩下屋敷に避難した。屋敷の周囲は土手で囲まれていたが、警護のためその上に竹矢来を巡らせた。以後それがならわしとなり「矢来町」の名が生れたという。屋敷内の庭園は小堀遠州作の名園として知られ、家光は二十八年間の将軍在位中に実に百五十回余もこの屋敷に忠勝を訪れた。因みに解体新書で有名な小浜藩医杉田玄白は、享保十八（1733）年、この屋敷内で藩医杉田甫仙の子として生まれている。（平成十六年の暮れ、矢来町の矢来公園に「小浜藩邸跡と杉田玄白生誕地」の碑が新宿区へ小浜市より寄贈。福井県知事、新宿区長、酒井家十九代当主・杉田家六代当主等の臨席のもと、お披露目の式典が挙行された）。

（5）　忠勝の若狭拝領

寛永十一年七月、家光は三十万人の供奉を引きつれ三度目の上洛をした。もろもろの重臣共々忠勝も供奉している。世にいう「御代

替の御上洛」であつた。軍列を見物する貴賤は近江膳所から京都市中まで「山川尺地なく群集」する中を二条城に入ったという。こうして姪にあたる明正天皇に拝謁、院御料を壱万石に倍増、市中全戸（三万五千軒から七千軒とも）の町人に一軒あたり米一俵に相当する金子を御代替の祝として下賜している。

このような盛事の中で家光は五十万石にわたる六大名の領地替えを発令した。姉婿の京極忠高を若狭小浜から世継ぎなく断絶した出雲松江二十六万石、老中の忠勝を武州川越から若狭小浜十一万三千五百石へ国替えした。かねて私は、京極忠高はともかく、武州川越十万石、時の老中酒井忠勝を何故若狭へ転封したのか家光の人事の裏を測りかねていた。忠勝の後も甲州街道の川越は江戸の西を固める要衝として歴代幕府重臣の封地であった。忠勝お国替えの縁により人口三十万の川越市と三万余の小浜市は今日姉妹都市として友好関係にあり、私もしばしば訪れているが両市の関係者ともその理由について確たるものを共有しているようではなかった。しかし、古くから大陸との交流しげく、奈良や京都への文化の揚陸地としての小浜は重要視されていたのである。県立若狭歴史民俗資料館の有馬学芸員は「北国や中国の物流の揚陸港の小浜・敦賀から今津をへて湖上を大津にいたるルート上の三拠点を占める、若狭一円・越前敦賀・江州高島郡の地位は、京都の経済を左右し、通行税を徴収する重要地点である」として、老中が支配すべき地域であったと納得できる解説をしている。後に西廻り航路によってその地位は減殺されるが、当時としてわが国の中では大きな役割を担っていた主要の地域であった。このように考えると家光の重臣忠勝の小浜への転封も理解できる。

『仰景録』には、家光が忠勝をして駿河十八万石への国替えを内示すると、忠勝は「権現（家康）様の地は恐れ多い」として辞退し、では甲斐二十四万石というと「信玄様の所とは」と拝辞したとある。こうして家光はやむなく領地高島郡に続く江州志賀をと内示したが「自分が厚遇に預かれば他の諸臣もとなり、国のためにいかがと」としてこれまた辞退している。『仰景録』は忠勝を「古今に独歩する御忠誠」と賞賛している。

ともあれ、この時代の武士階級はお国替えにより新たな土地に移動し、百姓町人は代々その土地にあって藩主らを見送り、新たな藩主らを迎えるのである。忠勝は領地換えにあたり今は福井県の無形文化財の「雲浜獅子」（川越では「ささら獅子」という）一行を川越から関東組と一緒に連れて来たことは有名である。前述小浜神社の例祭には四百年伝えられてきた「雲浜獅子」が今も奉納されている。

（6）　家綱と忠勝

前述のように忠勝は家光の信頼厚く、寛永十五年土井利勝と共に大老になる。利勝が数年で他界すると大老は忠勝一人となり幕府の枢機に参画する。慶安二年家康の三十三回忌にあたり、家光の寛永の大造替によって絢爛豪華になつた日光東照宮に五重塔を寄進している。このような寄進は三百大名中、唯一の大名寄進建造物であることを、今もって東照宮に参詣する人々が知るところである。（日光東照宮の建造物と共に世界遺産に登録されている。この五重塔は文化十二年火災により焼失するが同十四年十代小浜藩主酒井忠進に

より再建され、塔は明治維新まで小浜藩のみの寄進によって守られてきている。）

寛永の末期から慶安にかけて、将軍家光はたびたび老臣会議を開き幕府の最高方針を決めているが、この老臣会議に忠勝はつねに出席している。「歴代徳川家のカルテ」の篠田達明氏によると家光は二・三十代はあまり健康でなく、おこり（マラリア）にかかったり、目を患ったり、回虫が出たり、もがき（痘瘡）をわずらったりしたが、四十代から調子が良くなり、子どもも生まれ健康であったが、高血圧症の前触れに見舞われていた。そんな中家光は慶安四年四月二十日、四十八歳の働き盛りでポックリと亡くなった。高血圧性脳出血の再発であったと推測されるという。家光は死を前に忠勝に遺言して、殉死を固く戒め、自分（家光）の死を取りしきり幼少（十一歳）の家綱を守り立てて、幕政の安泰を期すよう命じた。しかし、幼少の将軍とあって、この政権交代は関ケ原の戦いから半世紀、幕府に不安の空気が漂うことになっていた。

こうして、家光の死に臨み、忠勝は江戸城に参集した御三家、御家門や諸大名に対し「家光かくれさせ給い、先代の子家綱に忠節を尽くすべし」と家光の遺命を伝え、さらに忠勝が「古より幼主のときは政道一決せず、危殆ある試しあり」と政権交代時の懸念を述べると、諸大名はその言葉を体していっせいに平伏したという。このことは忠勝の幕閣における地位を示すと共に家光との深い信頼関係も示しており、忠勝は家光の期待に応えて幕府の政権交代を取りしきり、幕政の安定をもたらしたのである。

忠勝と家綱の間にこんなエピソードが残っている。若い将軍家綱が屋敷の庭にある大きな石が目障りであるとして撤去を命じたと言う。忠勝は家綱に撤去するには塀を壊さなければならないと述べ、忠勝は命令を履行しなかった。家光をして「余の右手は忠勝、左手は信綱」と言わしめて知恵伊豆といわれた松平信綱は、「そんなものは庭の石の横に穴を掘って埋めればよい」というと、忠勝は「幼少の将軍が、どんな事でも自分の意志が通ると思わしめてはならない、伊豆の言うことぐらいは分っている」と断固として石を動かす事はなかったという。見事な幼少将軍への躾であった。

（7） 忠勝と殉死

前述のように、家光は死に臨んで忠勝一人を呼び、殉死を固く戒めて禁じ、幼少の家綱を補佐するよう命じたが、家光に近侍の忠勝の娘阿久里の夫、老中の下総佐倉城主堀田正盛や同じ老中の武蔵岩槻城主安部重次、御側出頭の内田正信が家光死の当日二十日夜家光を追って殉死し、翌二十一日や二十三日にも殉死が続いた。このことから寛文年間以降、幕府は殉死を禁じている。

『日本の近世』（高木昭作著）によると家光の死後十余年ごろ、著者不明の『玉滴陰見』という書物に家光に殉死しなかった側近を非難した落首・落書がのっている。知恵伊豆と言われた松平信綱を筆頭に家光在任中に、平和な時代戦争によらなく出世した重臣達の度胸のなさを非難しているのだ。

「大猷院様（家光の法号）ゴ遺言ニテ松平伊豆守信綱殉死無リケレハ、弱臣院殿前捨遺豆州大守殉死斟酌大居士　伊豆マメハ豆府ニシテハヨケレトモ、ヤクニタタヌハ切スナリケリ」など六人の重臣の名が上がっている。

慶安四年の落書に家光に殉死した三人から、忠勝等殉死しなかった老中にあてた奉書がつくられている。つまりあの世の家光の意を伝達する文書である。「急度（きっと）飛札をもって申し達し候、大猷院様ご機嫌残る所なく、極楽世界に着御され候間、心安かるべく候、然れば、御先に相越し候柳生但馬守一人、御前を去らずこれありといえども、かの者ばかりではご不自由に思し召され候間、そこもとに相残り候御譜代の内にても、取り分け日ごろお心安く召し使われ候中根壱岐守・永井日向守をさし越すべき候。右の外朽木民武少輔等四人は、勝手次第に片時も急ぎ罷り越し候よう、申し渡さるべく候。はたまたそこもとにおいては、吉利支丹の御詮議におんなずみ遊ばされ候間、井上筑後守儀、早々弘誓早船（ぐぜいの早ふね、念仏の中の天竺和讃に「帰命頂来天竺の　天の河原の川上に　弘誓の舟が磯につく　舟は白金櫓は黄金・・・」）をもって渡海せしむべくの旨、上意に候。恐々謹言。」差出人は先に殉死した大居士の三人名で、宛て名は酒井忠勝、松平信綱、安部忠秋の三老中になっている。この落書はこの時代将軍の側近・親衛隊（今でいう御学友か）であった者は死んで将軍につかえるべきとの庶民感情が、殉死しなかった家光の側近を名指しで非難したのである。

しかし、この落書には側近中の側近忠勝をあの世の家光のところに送れとはいわずに、生きて他の側近をあの世の家光の元へ送るようにと書いている。幕府における忠勝の役割を一般の庶民も薄々感じていたのであろうか。『玉滴陰見』に載せられている庶民の落書は当時の国政における忠勝の重要な役割を示唆している。

（8）　忠勝の治績

忠勝は三河以来の徳川の家臣、三河家臣団の総帥であった。主家のため石高は小さいながら三河以来の家臣、百四十五家を譜代大名として全国の要衝に配置した。これは大名の半数を超え、百近い外様大名を牽制、監視し、御三家など二十余の親藩大名にも取りいって、徳川政権の安定に寄与した。特に参勤交代の制度は、結果的に三百年の平和をもたらしている。幕末この制度を海防のためとして緩めた事が幕府の崩壊を早める遠因となったのである。

私はかつて酒井家第十九代の御当主忠和氏に問われた事がある。「当家は徳川四天王の一家か？」と。徳川四天王とは戦陣で武勲高く家康をして天下を取らしめて徳川幕府樹立に貢献した四武人（酒井忠次・井伊直政・本多忠勝・榊原康政）であって、この酒井家はむしろ文人として幕政を時代に適応させて運営した、今で言う極めて「有能な官僚」というべきであろう、酒井家は文治の家柄であった。

家光の側近中の側近でありながら、忠勝は殉死を許されず、『玉滴陰見』に見るように世間も忠勝をして生き抜いて、殉死をしなかった重臣達をあの世の家光のところへ送るようにと期待された忠勝の人柄を、「剛直ニシテ淵黙、重厚ニシテ厳格」「君寵ニホコリ権威ヲ振ハレ候様ナル儀アラセラレズ、万事御謙譲御質素」で、鼠嫌い、煙草嫌い、合理的で愛嬌もあったようである。謹厳、実直多くの大名からの信望も厚かった。

忠勝の死後約百年後に編纂された忠勝の言行録『仰景録』に、「御容貌、ウバ口チ、タ

レ頬、御顔ノ色赤ク、指ニテ推シ候ホドヅツノ黒痘ノ痕ハラリト御座候由・・・」と書かれ、往年の武田信玄に良く似ていたという。その日常生活は「朝六時起床、行水ノ後、八時朝御膳、コレヨリ祐筆ヲ召サセラレ、所用ノ文通弁セラレ、昼御膳、午後二時表エオン出、夕御膳、午後六時儒者ヲ招キ、八時ニ終了、十時ニ御寝所へ」この日程は毎日少しの変りもなかったという。忠勝は学問を好み本を読めば居ながらにして世界を知る事ができると学問の大切さを説いている。これは小浜藩に好学の藩風を生み、後に杉田玄白、中川淳庵など多くの学者を生む事につながって行く。

当時江戸と小浜の間は十二日から十五日を要しているが、忠勝は幕政に専念するため小浜への就国は思うにまかせなかった。前述のように小浜藩主二十二年間で都合四回僅か一年に満たなかったので、藩政への下知(指示)はすべて書下げでおこなわれた。現在酒井家文書として小浜市に保存されているだけでも四百通を下らないという。寛永の大飢饉にあたり、国許の家老都筑外記等三人に当てた書状は「たとえ一人たりとも餓死者出すべからず、如何なる策をとっても領民を救うべし」と命じている。「酒井忠勝書状『小浜市史』(藩政資料編一)」

家臣とのつながりも「愛子ノ父母ニアマエ候ヤウ」と述べ、小浜では武家屋敷を訪ね大きな屋敷には屋敷内に立ち入り見聞、小さい屋敷には門に入って見通されたという。竹原屋敷(九十三軒外)、西津屋敷(百五十二軒外)の武家屋敷は端々に大身の武士の屋敷を配置した。大身のものへは来訪者も多いため、全武家屋敷の隅々まで草深くしてはならないと家臣の屋敷住まいにまで手配する心配りの城主であった。また家臣との繋がりでは、家臣が出張して帰ると、目的を報告させるのは当然として、先々の山川草木、気候や人心など、現地に入って初めて分る出先の状況の詳しい報告を求めたという。家臣たる者迂闊に出張から帰るわけにはいかなかったのである。

忠勝は熊川筋、敦賀筋、丹後筋の道ばたに並木松を植えさせた。これで国の見込みもよく、往還の旅人の為にもよろしいとの思し召しという。(この松並木は私達の少年期まで若狭では見る事が出来た)。忠勝が述べる古語に、「為十年之謀者植樹、為百年之謀者植徳」と仰せ付けられたと見事な見識である。

家光の死に際して忠勝が諸大名に述べた如く、幼少将軍家綱への政権交代は政権の不安定が付きまとった。末期養子の制度のなかったこの時期、大名の廃絶おおく、一説に江戸に数万人という牢人がいたといわれている。家光の死と共に牢人たちによる有名な慶安事件が起こる。一早く状況を把握した忠勝等によって首謀者が自刃して治まるが、以後末期養子は認められるようになって牢人対策は効果を発揮する。

参勤交代の制度、武家諸法度、鎖国令や慶安の触書などは以後徳川三百年の平和をもたらしたので、日本歴史にとってあまり例を見ない長期の平和であった。その後の明治維新以来わが国は十年ごとに戦争をして、有史以来の敗戦に逢着した事を考える時、私は江戸時代の平和が長く続いたことについて、今一度考察が必要ではないかと思うのである。

（9）　忠勝と小浜城

中世は山城の時代であった。人々は攻め手に対して山城を拠点に侍も百姓も籠城して戦い、自分の土地を守ったのである。全国に当時の山城は数万を下らないという。小浜で有名な万葉集に詠われている後瀬山の山城（標高百六十八メートル）は、その城郭を今に残し国の史跡に指定されている。若狭を支配した若狭武田氏五代元光が大永二（１５２２）年、丹後街道沿いの後瀬山に山城を築いた。天正十（１５８２）年八代元明は明智光秀に荷担したとして、秀吉により近江海津で自害させられた。以後秀吉の家臣丹羽、浅野、木下が城主となり、京極高次の若狭入りまで約八十年間の城であった。

戦争の中世から平和の近世へといわれるが、秀吉の天下統一、家康の元和偃武へ。数万という山城の「停止令」の流れは秀吉令から家康令へと継承された。事実として多くの山城はその役割を終えていく。後瀬の山城もこのようにして関ケ原合戦で東軍につき、大津で西軍を引きとめた功績によって小浜入りした京極高次によって廃城。新に北川、南川、多田川、江古川の四つの川が小浜湾に注ぐ三角州、（ここに住む下竹原の漁民を西津浜に移し、）珍しい海岸城（水城）を造り始めたのが慶長六（１６０１）年である。

信長の妹、お市の方の子の三姉妹、真中お初（常高院）の夫、高次は城主九年にして小浜で死去、嫡子忠高（正室は家光の姉）が引きついたが、大坂冬・夏の陣への参陣や江戸城・大坂城普請など幕府への奉公多く小浜の築城は進まなかった。中世、侍や百姓が狭い山城よって戦っていることから、近世の城は平地でより多くの領民をも武士と共に籠城（会津の鶴ケ岡城の例）して戦うための広さが必要であった。三百年近く徳川氏の居城であった今日の皇居の広さを考えると頷けるものがある。こうして小浜城も本丸・二の丸・三の丸・北の丸・西の丸と多門五、埋門二、櫓二十五と、その面積は外堀を除き一万九千坪、東西二百八十四メートル南北二百六十四メートルの規模であった。したがって忠高移封の寛永十一年になってもなお城は完成していなかった。

そこへ忠勝の入国となる。入国と同時に幕府の許可を得て城の四周の石垣を一間高く積み上げ、天守閣の造営に取りかかる。棟梁は徳川幕府お抱えの中井正純に依頼し、大工は京都から、石工は近江の穴生衆。こうして寛永十三年の秋十月、江戸城の富士見櫓を模したという天守閣が完成、忠勝も就国して竣工式典が営まれている。しかし、多聞丸など全てが完成したのは正保二（１６４５）年と実に四十四年を要している。

もっとも、砂上の楼閣ならぬ砂上の城郭、土台固めに要した石や土は莫大で多大の労働力を要した事は想像に難くない。領民に炭俵四万五千枚を作らせ、これに浦々の刀禰に命じ漁民に舟を出させて蘇洞門の石を運ばせ、石を詰めて海中に投棄して根固めをしている。こうしたなか、天守台高さ十一メートル、総高二十九メートル、最上層（三間×四間）、中層（五間×六間）、下層（七間×八間）の天守閣が完成した（わかさ小浜の文化財）。

さて、このように完成した天守閣はどのように使用されてたのだろうか。忠勝書状によると家老の外は秘匿せよとして常時一万両（今日の十億円か）を蓄えさせている。「金

子二千両ずつを箱詰め、釘打ち、薄い筵に包み、縄をかけ、小判二千両入りと札を書さし候て、入申可候。

同日に鉄砲十挺、弓十張、鑓十筋、長刀五振、具足十領わさと二重目へ入置可申候。右銀子入候儀、人不存候様に諸家中之者へかくし候て入置可申候事」。と微にいり細にわたる指示を家老に出している。こう見ると忠勝の天守閣の活用は武器庫に見せかけて金庫として使用していたというべきか。こうして日本海に沈む美しい夕日に映えて二百三十年、若敦四郡のシンボルとして青戸入江に聳えたのである。

(10) 義民伝説

忠勝の時代に起きた若狭の義民松木長操について『拾椎雑話』「宝暦十（1760）年」巻二十二の二に「京極家の時、或いは酒井家の始めとも云う。郷方貢納之大豆四斗桝目にて納め来りし所を、御上より大豆は米と違桝目数多分たるべき物也と有、其後五斗入にて納め可申事に相成候に付き、郷中一統に訴訟致候得とも、聢と御聞届もなし。其内数百人大仰に相詰、先格の如く四斗入りにて納候願たいける。公儀より願ひは承届遣すべし、徒党を結びし曲事也と張本人新道村松ノ木と申者日笠原にてたく磔罪也。其時松木大音にて国中永代大豆納めの為に身命を失う者也、後々大豆を取入候者は我に手向けよ云捨て相果てぬ。此訳にて昔より今に至るまで、秋大豆刈取れは先日笠河原松ノ木松ノ木と云て手向けする郷中のためし也と。

松ノ木死罪御免の飛脚江戸より来る、今一時遅くして事過ぎたるよし」。との記述がある。

また『酒井家編年史料綜覧』承応元（1652）年五月十六日の条に「遠敷郡新道村ノ百姓庄左衛門松木長操ヲ同郷日笠河原ニテ斬ル（松木系図・東洋義人百家伝・酒井家御息方記）」とあり、これは忠勝治世の頃、米でなく大豆の貢納をめぐる百姓との大きい闘いがあったことをしめしているが、『酒井忠勝』著者は、義民伝承から史料により歴史的事実としての解明が待たれていると記しているが更なる研究が望まれている。

(11) 終わりに

こうして忠勝の生涯を俯瞰すると、実に堅実にしてしたたかである。慶安二年全国の農民へ呼びかけた「慶安の触書」は、「朝は草を刈り、昼は田畑の耕作に努め、晩には縄をない、俵を編み、夫々の仕事を油断なくせよ」・「食にもならず煩いのもとになるだけの煙草は吸わぬこと」など三十二ヵ条は七十六歳まで生きた忠勝の人柄の投影したもののようにも思われる。かつて将軍交代期の危機を乗り切るため、家康は二年で引退して秀忠を守り、秀忠もまた余裕を持って退き家光を見守っている。しかし、三代家光の不意の死去と後継の幼少家綱への交代は、家康、秀忠すでに世になく幕府始まっての危機であった。ひたすら忠勝は幕閣の大御所的存在としてその危機を乗り切ったもので、忠勝最大の功績というべきである。忠勝が配置した三河家臣団の譜代大名は明治維新後は華族に列し、貴族院の有力な母体となり日本の国政に大きく参画した。天下分け目といわれた関ケ原の戦いの勝者たちの後裔は、後の世に計り知れない人材を送ってきたかがうかがわれる。こう見ると関ケ原で敗れた長州や薩摩は二百八十年後の維新の動乱に勝利し、自ら山口高校や鹿

児島造士館をつくって後進を育て、陸軍は長州、海軍は薩摩とうたわれ、ながくわが国の歴史を動かす力になって行く。家康以後ここに四百余年、関ケ原の歴史は今に生きているというべきか。戦争の中世から平和の近世への道を開いた老中、大老と三十二年の幕閣の中心酒井忠勝が、江戸時代の平和をもたらしたといえる業績をあらためて検証しなければならない。

歴史が見直されつつある今日、杉田玄白、中川淳庵、梅田雲浜等とは別に酒井忠勝についても、見直さなければならない時期ではないか。長々と私論を述べた理由である。

若狭歴史民俗資料館、郷土史講座・有馬学芸員（酒井忠勝をめぐる人々）より、旧小浜藩士の娘歌人山川登美子の歌二首

小浜城址

天守かく　尋つむ雪の　しろあとに
夕ばえてりぬ　しらさぎのむれ

亡き父へ

たとえ身は　後瀬の山に　くつるとも
何忘るべき　酒井家の恩

（以上）

（本稿は平成十八年十一月二十八日　小浜市老人クラブ連合会での講演原稿に加筆したものである）

参考図書

酒井忠勝公年譜並言行抄（旧誼会）　江戸開幕・徳川家光・小浜藩祖酒井忠勝（藤井譲治著）　酒井忠勝をめぐる人々（有馬香織福井県立若狭歴史民俗資料館学芸員）　小浜神社誌（小浜神社社務所）
日本の近世（高木昭作著）　戦国の若狭（大森宏著）
若狭小浜城（小浜城跡発掘調査団）　土一揆と城の戦国を行く（藤木久志著）　拾椎雑話・稚狭考（福井県立図書館・郷土誌懇談会）　新詳日本史図説（浜島書店）